

林業経営の後継とその課題—大学の卒業論文を参考にして—

佐藤孝吉（東京農大地域環境）

森林所有者は、民有林からの木材生産に関わるだけでなく、時には農業や他産業の担い手でもあり、同時に山村における地域社会の構成要員として、社会的に、文化的に重要な役割を担ってきた。林業経営の継承は、先祖から受け継がれてきた物質的のみならず精神的、文化的な森づくりの歴史である。林業経営の親族への後継を単純に衰退させて新しい形態を構築するよりも、意欲的に林業経営を行い継承ができるような状況にすることが、山村社会の健全な発展へとつながると考えた。厳しい林業事情に伴う、雇用、所有や相続に関わる税金、機械導入の負債などの危機的な現実問題を認識し、この状態から脱却して継続的な林業経営を実現するためには、何をしなければならないのか。

東京農業大学林学科（現在の森林総合科学科）の民有林の後継者育成に果たしてきた役割は大きい。「教育の現場から後継者について考える（山林：大日本山林会，No.1460, 1461, 1463, 1464, 1467, 1474, 1479）」、卒業論文指導を通じて聞き取りをした林業経営者、後継者の考えなどをもとに、林業経営の後継について考察した。

林業経営の後継を①林業経営の継承（産業として木材生産活動や技術の継承）、②森林経営の継承（森林の公益的機能を保持する最低限の森林管理を行う）、③森林所有の継承（森林の経営や管理を委託する）、④森林の放置（森林の所有に意義を持たず、責務も感じていない）の4つの段階を想定した。

後継元（A）と後継先（A'）双方の関係を図のように①林業経営、②森林経営、③森林所有、④森林の放置と関連させ全体で16通りのパターンを想定した。そして、後継条件を、第1に後継元の事情（後継か自由か）、第2に後継先の事情（林業や山村に興味があるか他地域や他産業に興味があるか）、第3に後継を取り巻く環境条件（林業経営事情、生活事情、地域事情）と考えた。

林業経営の多様な形が存在していて、しかも流動的な状況の中で、継続的に後継者を育成し、支援するためには林業意欲を高める必要がある。その1つの方法として「ふるさと材構想」（佐藤孝吉「ふるさと材構想」による民有林経営改善のための一考察，56回日林関東支論，2005,37-38）を位置づけた。

（連絡先：佐藤孝吉
satota@nodai.ac.jp）

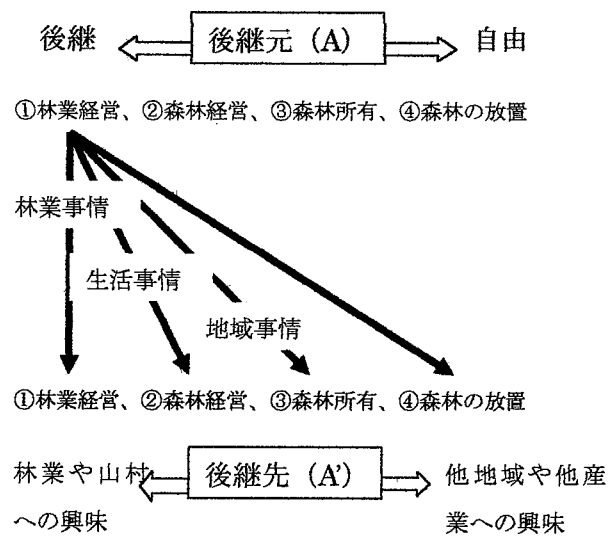


図 林業経営の後継パターン